



写真1 1年地域学入門（水生昆虫調査）



写真2 2年地域探求I・授業風景（教育教材ゲームづくり）



写真3 3年地域探求II（小学生への八幡山彫刻公園ガイド）

現地 報告

兵庫県香美町

高校と 地域を育てる 学びを通じた 関係人口づくり



鳥取大学地域学部
教授
つづい かずのぶ
筒井 一伸



兵庫県立村岡高校
教諭
いまい のりお
今井 典夫



兵庫県地図

過疎地域の県立高校の 現場から

兵庫県美方郡香美町は過疎化・少子高齢化が急速に進行している地域である。その中で、兵庫県立村岡高校は「地域に学び、地域と協働する学校」を展開している。村岡高校は1学年2クラスの小規模校であり、20数年前から学級減が危惧されてきたが、地域・父母・教職員が一体となって学級減阻止の取組みが行われ、1999年には住民過半数の請願署名を集め、議会で採択され、学級減をくい止めた。

また類型名に沿った学習内容が求められ、「地域」をテーマに学習を進めることになった。しかし、保護者の関心は、授業内容よりも出口の確保。保護者の理解が得なければ募集に反映されない。受験に直接関係のない「地域」を課題とする探究学習。どうすればこの類型の学習の意義を理解してもらえるのか？

そこで、大学教授の助言もあり、今までの「知識伝達型の授業」から「探求心を育てる授業」に転換を図り、地域を教材として学ぶ力を育て、進路実績に繋げることを目指した。求めたのは受験対応の学力でなく、「自己の夢への探求心の育成」であった。

また学校が「地域づくりの拠点」となり、その結果「人づくりの拠点」になることによって、学校が存続していくことにつながる

展開している。村岡高校の取組みが10年を過ぎ、筆者らも関わって2022年8月に1冊の書籍を刊行した。タイトルは「学びが地域を創る——ふつうの普通科高校の地域協働物語」（山根俊喜・武田信吾・今井典夫・藤井正・筒井一伸編著、学事出版）。村岡高校の歩みはぜひともこちらをご一読いただきたいが、本報告では「地域探求」の取組みをはじめ、村岡高校が意識してきた「地域を育てる学力」とは何か、そしてそれが過疎地域の地域づくりにかかわるのか、今後のプロセスを紹介したい。

教師にとつての 「地域を育てる学力」

村岡高校の取組みが始まった当時、県下各校の特色化がうたわれ、村岡高校も例外ではなく、その流れに乗らざるを得なかった。少子化が進み、定員割れを起している村岡高校にとって、学校の存続を掛けた大きな決断を迫られていた。また、近隣の他校への流出をいかにして止めるか。村岡高校の特性を活かした授業とは何か？ 他県の学校の視察、研究、検討を重ね「地域創造類型」を創設することが決まった。

と考えている。そのためには、各々が地域の一人の人間として責任を持つということが重要で、そういう地域づくりをするなかで人は育っていく。これは高校生だけではなく、教職員はもちろんのこと、地域の方々も同じであろう。新任教員が村岡高校から転出する際に次のように語ったのが印象に残っている。

「多くのことを経験させていただいた。最初に着ぐるみを着てあいさつ運動をしたことも、連日夜遅くまで進路指導をしたことも『村高モデル』。地域だけでなく教員も『頑張る大人』として生徒とともに成長していくことを学んだ。これからも心において教員を続けていこうと思う」

村岡高校での取組みは、多くの

中央文化社発行の「総合で役立つ」専門用語のご紹介

そして、将来にわたって自ら主体的に地域のポテンシャルを見出し、地域活性化に協働・参画する資質・能力として具現化されるものであり、生徒が希望する多様な進路にも対応するものである。すなわち、知識偏重の競争型教育から脱却した、生活の中でたくましく生きて働く、主体性や生きる意欲を伴った学力であり、地域づくりの過程を通して、地域と協働し、地域の魅力を活かして、地域を育て、自らも育つ学力といえる。私たちは、そろそろ「学力の捉え直し」をしていく必要があるのではないかと感じている。

村岡高校は地域創造型設置当初より「郷土について知り、知的探求の方法を学ぶ」を主眼として取り組みをすすめてきた。地域に積極的に向き、地域の方々と協働して「地域づくり」をすすめる中で、生徒は「生きる力」を獲得し、大きな成長を遂げている。また、生徒にとっての「地域づくり」(地域探求・地域協働活動)は最終到達点ではなく、「未来社会を創造していく」ための通過点であり、身近な実践の場である。そこで「地域づくり」をすすめていく中で、よりよい社会を築くために主体的に課題解決を行う能力を身につけること、すなわち「主権者教育」を主眼に置いて取り組みをすすめていくことが重要である。ここで、村岡高校で3年間過ごした生徒の感想を紹介する。

「積極的に」や「自ら動く」というのは口では簡単に言えるけど、行動に移すことは決して簡単ではありません。(中略)地域創造系で過程を考えることの必要性や難しさを知って、自分のしたいことや成し遂げたいこと、何に対しても自分の意見を持つことが大切で、それをしっかり自分の言葉で周りに伝えることが必要だと学びました。そこから私は、ただ単に動くのではなくて、現状を見つめ自分の意見を持ち、周りと意見交換をすることができて、それが「自ら動く」ことのアートだと考えるようになりました。

「地域を捨てる学力」と「地域を育てる学力」

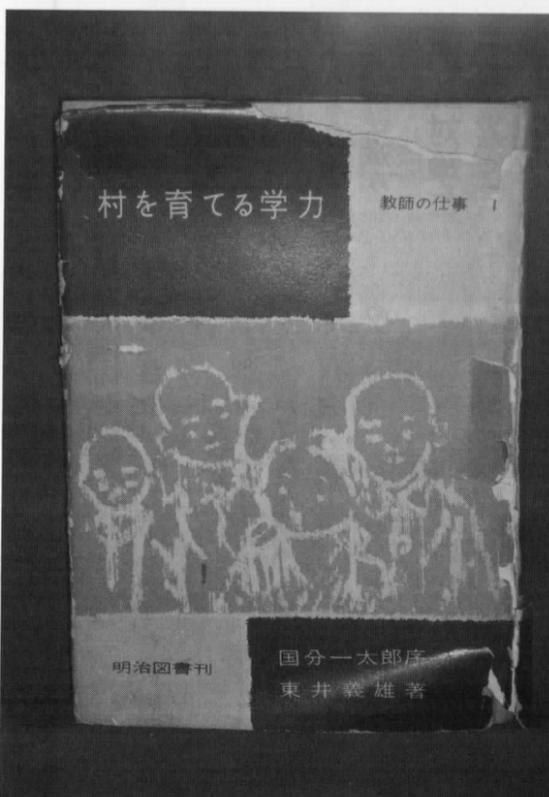
兵庫県但馬地方の小学校教員であった東井義雄(1912~1991)は、昭和30年代に「村を捨てる学力」、「村を育てる学力」(写真7)を論じた。

当時、農村の子どもに学問は不要だという親や村人の意識がある一方で、逆に子どもたちの多くは村を出て行く運命なのだから、進学用、就職用の学力を身につけさせるべきだ、という意見も存在していた。

東井はこうした見解を退け、学校での教育の目的を「村を育てる学力」という言葉で表現した。進学・就職用の「村を捨てる学力」では「村を育てる学力」にはなり得ないが、村を愛し育てられるような主体性のある「村を育てる学力」であれば、同時に進学・就職にも通用すると東井は主張した。

言い換えると「村を育てる学力」とは、地域生活の中で生きて働く、生活化された科学知(科学的思考)と、科学化された生活知(生活的思考)からなるといえる。

写真7 東井義雄著『村を育てる学力——教師の仕事』明治図書出版、1957年(東井義雄記念館所蔵)



①「学校づくりは地域づくりである」という思いを地域と共有する

②地域の「ステキな大人(若者)

と高校生を結びつける

③高校生と地域が「問い」を立てる学びにつながるような教育実践をすすめる

④学校と地域が定期的な「情報交換の場」を設け、地域の課題と学校の課題を明らかにしていく

⑤学校存続等の危機感を全教職員で共有し、地域へ「一歩踏み出す勇気」をつくり出す

生徒にとっての「地域を育てる学力」

2020年度からは文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革事業」の研究指定校となる。

しかしながら、最終的には生徒・教職員・地域の方々が「楽しい」「前向き」と感じるような取り組みをすすめていくことが何より大切である。

り、生徒が地域での学びを通して「地域を育てる学力」を身につけた、地域を愛する未来型人材の育成を目指して取り組みをすすめた。「地域を育てる学力」とは、地域住民とともに地域課題を実践的に解決するプロセス(地域づくりの過程)を通して、地域課題の解決を考案し実践することで、よりよい未来の創出に資する活動を展開することのできる学力である。



写真4 総合的な探究の時間(集落調査班:聞き取り調査)



写真5 総合的な探究の時間(村高除雪隊)



写真6 総合的な探究の時間(地域福祉班:放課後こども教室スタッフ)

中央文化社発行の「議会で役立つ」専門書籍のご紹介

NEW!

ポイント別
わかりやすい
地方議会・議員の
基礎知識

鶴沼 信二 著
元全国都道府県議会議員会事務局長

Q&A
形式で
読みやすい

中央文化社

鶴沼 信二 A5判 204頁
(元全国都道府県議会議員会事務局長)

新刊 本書は毎回テーマを定め、Q&A形式で重要なポイントを解説しています。難解な法令・条例・行政事例の理解を助け、地方議員の皆様の議会活動をサポートし、議会運営の疑問に答える書籍となります。

2,750円(税込・送料別)

好評書籍

議員に役立つ
地方創生
アイデアブック

牧瀬 稔 著
社会福祉学博士 専攻教授
岡山県立大学 社会学部 教授

地域を元気に
するポイント
解説付き!

中央文化社

牧瀬 稔
(関東学院大学法学部准教授)

Uターン、Uターン人口を獲得し、自分たちの「まち」の魅力度をアップするためのアイデア・戦略を、成功・失敗事例を検証しながら具体的に解説します。

2,640円(税込・送料別)

好評書籍

広報で
差がつく
議会力

市町村議会
広報クリニク

特別対談
読みたくなる
議会広報紙の
つくりかた

中央文化社

芳野政明 (広報コンサルタント)
吉村 潔 (エディター・広報アナリスト)

議会広報紙に対する技術が高められるとともに、住民にわかりやすい紙面作りのためのポイントも目につきます!!

2,530円(税込・送料別)

市町村議員のための
よくわかる
地方税

月刊「地方議会人」別冊

地方税に関する近年の動きをこの一冊で解説!

市町村議員のための
よくわかる
地方交付税

月刊「地方議会人」別冊

地方交付税に関する近年の動きをこの一冊で解説!

市町村議員のための
よくわかる
地方債

月刊「地方議会人」別冊

地方債に関する近年の動きをこの一冊で解説!

月刊「地方議会人」別冊

地方議会において活動していくうえで、地方自治を支える「地方税」「地方交付税」「地方債」を理解することは極めて重要です。各書でそれぞれの仕組みや課題などについて、わかりやすく解説!!

各 1,980円(税込・送料別)

市町村議員のための
わかりやすい
新地方公会計

監修 青山公会計公監査研究機構
監修 鈴木 豊 (青山学院大学名誉教授)

A5判 232頁

新地方公会計の基本的知識、具体的な事例をわかりやすく解説。巻末では議会・自治体での審議事例のポイント解説も収録!!

2,640円(税込・送料別)

よくある
市町村議会の
運営事例

監修 全国町村議会議長会

A5判 158頁

各町村議会の本会議や委員会開催の際に生じた、特によく耳にする運営に関する基本的な疑問や質問等への照会事例と、その解説を収録!!

2,200円(税込・送料別)

よくある
市町村議会の
運営事例

監修 全国町村議会議長会

A5判 158頁

各町村議会の本会議や委員会開催の際に生じた、特によく耳にする運営に関する基本的な疑問や質問等への照会事例と、その解説を収録!!

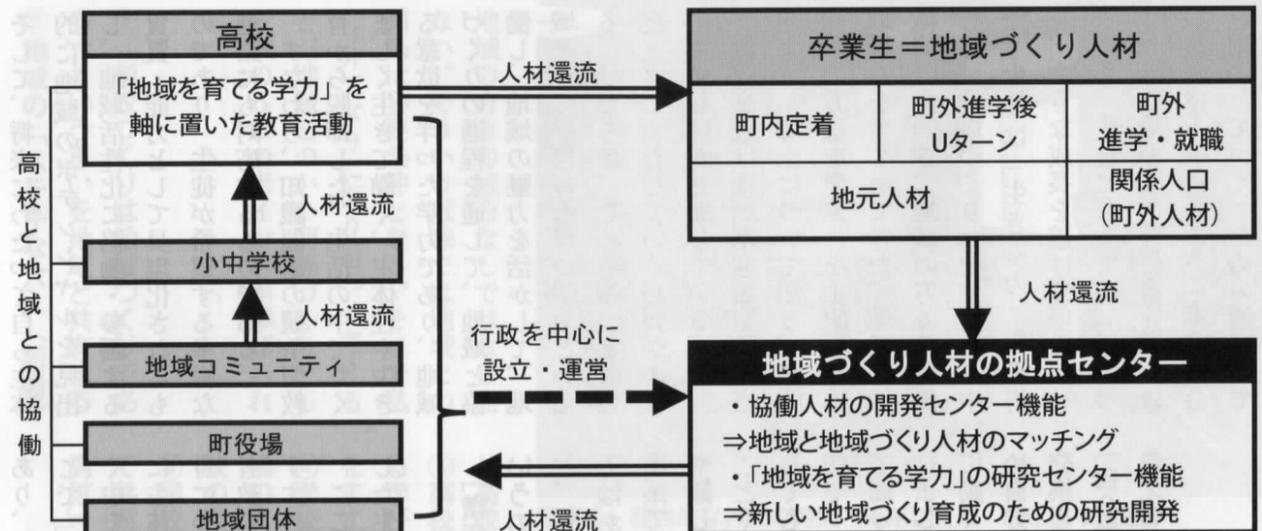
2,200円(税込・送料別)

ご注文・お問い合わせは 株式会社中央文化社まで TEL 03-3264-2520 FAX 03-3264-2867

中央文化社 検索サイトで「中央文化社」と入力。弊社ホームページにて書籍詳細をご確認、ご購入いただけます

左記QRコードをスマートフォンで読み込んでいただいても、弊社ホームページをご確認いただけます

政府刊行物 全国官報販売協同組合 『クレジットカード』をご希望の場合：検索サイトで「政府刊行物」→政府刊行物 EC サイトの検索画面に「中央文化社」と入力すると弊社書籍をご購入いただけます (https://www.gov-book.or.jp/book/)



図「地域を育てる学力」と地域づくり人材の還流

「地域を捨ててる学力」が過疎化を助長

この「村を捨てる学力」が過疎問題を助長した一因でもある。高度経済成長期の当初はイエと農地を継がない次男・三男が、余剰労働力として、都市の工業化に伴う労働力不足を補っていたが、その後は長男も含めた子どもたちがこぞって都市へ転出していく基調が続いた。それは農村経済の相対的地位の低下に加えて、「こんな村にいても……」というネガティブな親世代の地域への思考と、それに「応えるため」の「村を捨てる学力」への盲目的な信奉が要因であった。

しかし21世紀に入り、農村への関心の高まり、また「田園回帰」と呼ばれる地方移住の増加傾向が顕著になってきた。例えば「鳥取県出生数7年ぶり増」「子育て世代の移住が順調」(『日本海新聞』2023年1月12日付)といった報道がなされるなど、希望が持てる社会変化の萌芽がみられはじめています。

「過疎対策と「地域を育てる学力」

ところで2021年4月に施行された「過疎地域の持続的発展の支援に関する特別措置法」では第4条の目標で「地域を担う人材育成・確保」がはじめて明記された。いま人材育成は学校のみに任せるのではなく、地域が積極的に関わるのが求められ、その拠点たる学校と地域との協働が政策課題なのである。「地域を育てる学力」を軸にした高校と地域との協働を通じて、新しい関係づくりも展望できる。

上の図をご覧いただきたいが、「地域を育てる学力」は、昨今注目される「関係人口」とも親和性が高く、地域づくり人材の還流を目指すことができる。高校を卒業後に進学や就職で地域を離れるとしてもいづれ戻ってきてほしい。これは地域として求めたいところだろう。しかしながら一定数、地域を離れて暮らし続ける卒業生がいるのは自然であり、それを止めることはできない。むしろそのような地域から離れていても地域に関わり続けるような関係人口に卒業生を結び付けることが大切であり、その基礎が「地域を育てる学力」を軸にした教育である。そしてその関係を継続させるための「仕掛け」が必要である。

図では「地域づくり人材の拠点センター」としたが、卒業生を地域づくり人材として把握し、連絡調整をしながら、高校だけではなく、小中学校、地域コミュニティ、地域団体、もちろん行政にも人材還流をしていく。この「仕掛け」は当然のことながら高校だけではできず、むしろ過疎法などの趣旨をいかして行政や地域のアクターが積極的に関わっていくことが求められる。

2023.11 contents

グラビア

- 01 現地報告1 宮崎県椎葉村
- 02 現地報告2 徳島県神山町
- 03 現地報告3 京都府綾部市
- 04 現地報告4 兵庫県香美町



巻頭言

06 人生の残り10万時間を、地方創生へ！／篠谷浩介

©青木優佳氏

特集

- 08 「にぎやかな過疎」の形成
人が人を呼ぶ地域づくり——その本質と政策
／小田切徳美
- 12 2050年、持続可能な地方づくりのために
AIが示す「地方分散型社会」
／広井良典
- 16 女性の県外流出を減らすには地方圏の変革が必要
／宮本みち子

現地報告

- 20 【宮崎県椎葉村】地域の魅力 = 人の繋がり
期間限定の活動を原動力に
／天野朋美
- 24 【徳島県神山町】「意図した偶発性」がもたらした高専開校の奇跡
／篠原 匡
- 28 【京都府綾部市】新しい田舎生活のすすめ
移住立国あやべから学べるヒント
／蒲田正樹
- 32 【兵庫県香美町】高校と地域を育てる
学びを通じた関係人口づくり
／筒井一伸、今井典夫

【今月の表紙】 秋深まる青い池



北海道美瑛町
表紙撮影 / 大塚昭彦

美瑛町は北海道のほぼ中央部に位置しています。「丘のまち」といわれるとおり、なだらかな丘陵と自然環境の豊かな町で四季を通して絵になる所です。人口9,471人、面積676.78km²で主要産業は農業です。観光も昨年の来訪者は181万人に達します。

写真は白金に在る「青い池」です。池の水が青い理由は、白金温泉からアルミニウムを含んだ地下水が流れ出て美瑛川の水と混ざり、目に見えないコロイド状の微粒子が生成され、それが青く光るため。当日は池の周りにある白樺林が見事に黄葉、池のブルーとの競演を上空より表現してみました。

特集 「ひと」の集まる 地域づくり

連載

- 38 議会人の声 (第7回)
これからの議会人に求められるのは議員自らの発信力と聞く力／青田知史
- 40 議会運営講座 (第8回) / 川本達志
一般質問パワーアップ・ブック
執行部を動かすための質問とは②
「質問の構造を考えて準備しよう」
- 46 議員研修講座 (第26回) / 長谷文子
女性議員はどうすれば増えるのか
「女性が元気なまち、人口増加が続く花のまちで初の女性議長誕生」
- 50 教養講座 (第16講) / 河村和徳
地方議員のための選挙トリビア
「大規模自然災害と選挙」
- 54 議会広報紙を見やすく、わかりやすく
(第7回) 議会を身近にするアクションと広報
／吉村 潔
- 58 議長会ニュース / 全国市議会議長会
全国町村議会議長会
- 62 変える議会、変わる議会
——改革はどこまで進んだか (第30回)
愛知県幸田町 / 人羅 格
- 64 随想 地方議会について考えたこと (第32回)
今、あらためて議会の「多様性」を考える
／山岸絵美理

高校と地域を育てる 学びを通じた関係人口づくり



4 かみちょう 兵庫県香美町

過疎化・少子高齢化が急速に進行している香美町の県立村岡高校では、20 数年前から学級減が危惧されてきた。そこで 2011 年度に地域協働活動を通して学ぶ力を育て、進学実績にも繋げる試みを開始。村岡高校が唱える「地域を育てる学力」とは何か、そしてそれが過疎地域の「地域づくり」にどうかかわっていくのか。学びを通じた関係人口づくりのプロセスを、今井典夫教諭と鳥取大学の筒井一伸教授のおふたりの共同執筆でご寄稿いただく。 詳細は本文 P32~36 にて



写真上：
地域創造系2年生による「地域探求1」授業風景

写真中左：
総合的な探究の時間（環境B班：森の健康診断）

写真左：
雪景色の村岡高校校舎

写真提供 / 今井典夫氏（村岡高校教諭）